ホスピスを目指す原点

大学時代、血液免疫内科の臨床実習において担当となった患者との出会いが私の医師としての原点である。

Ｔさんは悪性リンパ腫末期の４１歳の女性で、同じく学校教師の夫と２人の子供（小学生）の４人暮らしであった。実習初日、担当医よりＴさんを紹介されたが、彼女は布団の中から顔を出すことなく、一言、『“はい”か“いいえ”の質問だけにして』と強く言い放った。前途多難な思いであったが、私は気を奮い立たせて“とにかく毎日顔を出して、声をおかけしよう”という気持ちで、連日病室へ向かった。しかし、『痛みはいかがですか？』などと問いかけても、片言の返事しか得られず、いつも数分で部屋を出てくる毎日であった。

１週間が経過した日曜日、この日も懲りずに訪室したが、何とその時、彼女は初めて布団から顔を出し、『先生、私の牧師になって。自分でもう駄目なのはわかっているから、せめて悟りのようなものを開いて死にたい。自分では無理だから聖書を読んで欲しい』と一気に語った。

彼女が心を開いてくれたことは、素直に嬉しく、その思いに応えたかったが、信仰心のかけらもない私が牧師になれるはずが無かった。悩んだあげく、私は以前より愛読していた、むのたけじ氏のエッセイ集「たいまつ」の中から“生きる”というテーマのものを５篇選択してレポート用紙に写し、持って行くこととした。いずれも悟りを開くというよりは、希望を持ち、絶望の中に光を見出せるような内容であった。

翌日それを持っていくと、Ｔさんはとても喜んでくれ、以後毎日５篇ずつしたためて持っていくこととなった。いつしか彼女に笑顔がみられ、会話は家庭、特に子供のことにも及び、治療についても（例えば丸山ワクチンについて）相談されることがあった。

実習が終了した後も、その関係は続いたが、ある時、外泊についての相談を受けた。主治医からは“危険だから”、と止められているようであったが、“子供たちのためにも帰ってあげたい”という決意は固かった。結局、数日後に外泊をされたが、自宅で容態が急変し、救急車にて病院に戻ることとなる。この時、既に昏睡状態であり、残された時間はわずかであると推察された。私も知らせを聞いて、夜中に慌てて病院に駆けつけたことを覚えている。

数日後、彼女は一度も目を醒ますことなく、家族に見守られて静かに息を引き取られた。

Ｔさんが“福徳先生に渡して”とご家族に伝えていた書“白い巨塔”を後日、頂いた。病室で色々な話をしたが、２人で医者の悪口を言って盛り上がった事を思い出す。この本を下さったのは彼女から私へ“心ある医師になって欲しい”というメッセージだったのかもしれないとその時ふと思った。その頃、廊下である先生に会った時にＴさんの話題が出たが、その先生は『止めたのに外泊してしまって。自分が悪いのさ。』と言い放ったのには驚きであり、医者の奢りを感じ取った。

私はＴさんとの出会いの中で末期癌患者の苦悩を知った。この時、１９８５年は、既に日本でもホスピスが開設されていたが、私はホスピスという言葉すらまだ知らなかった。しかし、私は医師として、余命いくばくも無い患者さんの身体的ケアのみならず、精神的な支えとなり、残された生を悔いなく全うできるよう支援する事こそ、重要であり、自分のやるべき事なのでは、と強く感じた。

今も、彼女が入院中に書いて送ってくれた手紙を大事にしまってある。その中の心に残る言葉を最後に紹介する。

『先生のおかげで“生きよう、生きなければ”と思うようになってきております。きっと又励ましに来てくださいね。
その時は自分の足で歩いて生きるともし火がろうそくからせめてまめ電球に変わっているように、どうか神様お守りください。』

『お医者さんって患者の病気を治すほかに精神的な支えになるのも大事な仕事のひとつと思います。』

（平成 14 年 7 月 13 日　著）